

水野杏紀著 『易、風水、曆、養生、處世 東アジアの宇宙観』  
コスモロジー

大野裕司

中國學の歴史からいえば術數學研究はまだ若いジャンルである。ここ数年になってやっとその蓄積が公表できる段階にまで至った。すなわち近年、シンポジウムが連

続的に開催され、資料集<sup>(1)</sup>、譯注、論文集<sup>(2)</sup>、學術書が立て

続けに公開されている。しかし、初學者のための入門書・概説書の類は存在していなかった。本書は待望され

た本邦初の術數學入門書といえよう。

本書はその書名が示す通り、易・風水・曆・養生・處世といった術數關連の諸分野の解説を行い、これらに通底する東アジアの宇宙観<sup>コスモロジー</sup>を探る内容となっている。著者の該博な知識に裏付けされた簡潔な解説はこの五分野の

基礎知識を得るための辭典・工具書として見ても非常に有用である。目次は次の通り。

序章 なぜいま東アジアの宇宙観<sup>コスモロジー</sup>なのか

第一章 曆―四季のめぐりと自然のリズムを感じる暮らし

第二章 易―萬物の有機的連關と共生

第三章 風水―大地と人、人と人がつながりあう空間

第四章 養生―未病に處する身體と樂天的人生

第五章 處世―身を修め、國家を治め、人の絆を重んじる

『易、風水、曆、養生、處世 東アジアの宇宙観』  
コスモロジー

『易、風水、曆、養生、處世 東アジアの宇宙観』  
コスモロジー

引用・参考文献一覧 あとがき

各章の内容を概括すれば次の通り。序章は本書の目的と構成を説明する。また本書において「東アジアの宇宙観」とは「私たちを取り巻く宇宙、天の時間と地の空間、その間にいる人、そこでの趨吉避凶のための思想、技術」(二〇頁)を指すことを述べる。

第一章「曆」。曆の基礎知識および陰陽五行説の解説もここで併せて行われる。解説は基本的には『淮南子』等の漢代資料に據るが、漢代以前の状況についても新出土資料(『日書』等)を用いて最新の學説を補う。舊來のこの分野の概説書は科學史家或いは日本史家によるものが多く、中國學専門家による原典に基づいた解説は近年にあつては殆ど書店に流通しておらず貴重。

第二章「易」。易の基礎知識の解説および日中の易學史のダイジェストだが、江戸期の土御門家の占例の紹介など著者の本領を發揮した部分に読み應えがある。ただし數字卦などの易の起源に関する解説はごく簡単な紹介

に留まる。

第三章「風水」。日中の風水史のダイジェスト。文學・建築學からの風水史の解説になっている。なお歐米における人類學、フィールドワーク主體の風水研究の成果については言及されない。

第四章「養生」。經絡など傳統醫學の基礎知識の解説、日中の養生理論の紹介を行う。

第五章「處世」。處世を軸に孔子、老子、宋代以降の儒教思想史、江戸儒教思想史の概説を行う。本誌讀者のような研究者にとつては既知の内容も多いかと思われるが、本書は讀者の多くに占い師や好事家が含まれるであろうから、そういった讀者を想定して術數を深く理解するには思想的背景の理解が不可欠であることを周知するという役割を果たす。また本章を通じて本書が巷間に流布する古い解説本とは一線を畫する學術著作であることを讀者は理解できよう。

本書は易・風水・曆・養生・處世を個別バラバラに説明して終わるような單なる解説書ではない。本書を通讀

すればかかる五分野に共通して流れる思想・發想、生きするための規範の存在が確實に存在することを讀み取る事ができる。それは具體的には序章においてもあらかじめ明示されているが、『易』繫辭上傳「天を樂しみ命を知る」(二二三頁等)に代表される樂天主義、單なる樂天主義ではなく循環する宇宙という前提に立つ「極まれれば好轉」という價值觀、および『老子』第四十四章「足るを知る」(一〇二、二三〇頁等)或いは『易』の艮卦に代表される「止まる」「分限をまもる」「節度を持つ」(二二三頁等)というあり方である。本書は序章で提示されたかかる考え方が、本書を通讀することで確かに五分野に通底していることを確認できる構成になっている(或いは「結論」の章を設けてもう一度このことを強調してもよかつたかもしれない)。

ただし、本書においてはこの兩者を統合して一個の概念として提示することはない。例えば臺灣の人類學者である李亦園氏は、個人の命運と時間との調和(原文は和諧、以下同じ)と均衡を圖る手段が八字や擇日といった

占いであり、人間の造營物と自然環境との調和と均衡を圖る手段が風水であり、一個の有機體としての人體と食物や藥物との調和と均衡を圖る手段が傳統的醫術・養生思想であり、人間と鬼神或いは人間と來世の關係の調和と均衡を圖る手段が祭祀であるとし、かかる調和と均衡を求める發想を中國文化の一大特徴と見做し、これを『禮記』中庸篇から取って「致中和」の宇宙觀と名附けている。<sup>(6)</sup> 本書の考え方とも通底する部分があるのでなからうか(ただし李氏は「樂天」について言及しておらず、その點で本書の意義は大きい)。

また、本書の特徴に、五分野の日本における受容と展開について多くの頁が割かれている點が挙げられる。「我が國には古くより中國から思想や文化、技術などが傳播し、日本の氣候風土や地理、文化、社會、習俗などに合せてアレンジされ、獨自の形で社會に浸透」(二四頁)、「風水も日本に傳播し、江戸時代には日本獨自の家相という體系をつくりだした」(二五頁)、「醫事についても、中國傳統醫學は、日本の氣候風土、習慣に合せた

『易、風水、曆、養生、處世 東アジアの宇宙観』

五四

鍼灸、按摩、薬方などに「発展」(一五頁)、「近年我が國では節分におけるあらたな風習がうまれつつある。節分はその年の恵方に向かって食べると幸いがあるという「恵方巻き」である」(三二頁)、「東北鬼門の考え方は中國から傳播したものの、日本獨自在發展している。それは日本の地理自然、慣習、習俗などとも關係しているのであろう」(二六四頁に引く趙仁哲氏の言)、「日本では新しいものが傳播し、これまでの傳統、やりかたと異なる場合、これまでの傳統的なものを重視し、それを残しながら、そこにあたらしいものを加えてアレンジする傾向がみられる」(二四七頁)。このように著者は五分野の受容と展開において日本に獨自の展開があったことを明らかにする。これを解釋して、著者は古代中國で形成された根幹的思想・文化(宇宙観)が、日本に傳播後、上述の様な變遷變化をしつつも、明治に至るまでこれを「ドメインとした精神性とアイデンティティ」(二六頁)があったとし、「表面的には失われたようにみえるが、その精神はわれわれ日本人のDNAのなかにも息づいてい

る」(二五一頁)とする。

しかしながら當然の疑問が湧く。日本に合わせてアレンジし獨自の形にした時点でそれは「古代中國の宇宙観」ではなく日本獨自の宇宙観ではないのか、と。評者はこの獨自の展開をもってここに日本特有の宇宙観の痕跡を見出すべきだと思し、なぜ獨自在アレンジする必要があったのかを検討すべきだと考える。また著者はそう考えないとしても、かかる想定される反論や異論に對する検討を通してはじめて、各地域において變遷變化による差異があったとしても古代中國の宇宙観が東アジアにおいて共通の「ドメイン」として眞に機能していたことを證明できよう。しかしながらこれは一般向け概説書である本書に對しては過度の要求であろうし、今後評者も含めた術數學關連研究者が探究すべき課題でもあろう。

とは言うものの、本書が提出する假説に一定の魅力があることは確かである。本書が易・風水・曆・養生・處世に通底する東アジアの宇宙観を析出したことは中國

思想研究史上において大きな価値を有する。例えば、東アジアに共通する宇宙観コスモロジーの存在は、術數學が中國のみならず東アジア各地域においても受容され、今日まで傳承され続けていることを理論的に説明することを可能にする。本書を今後の術數學研究の「ドメイン」として、つまり本書を基礎に、或いは研究者間の共通理解として、術數學ひいては東アジア思想の歴史的變遷、地域的特徴を探るようにすることでより深い分析が可能になるのではなからうか。

さて、本書二〇六頁に「人文」という語の出典について述べる。「周易」賁卦象傳「文明以止、人文也。觀乎天文、以察時變、觀乎人文、以化成天下」を本書は「文明とは仁智ある學問、教養、藝術などの徳が輝くことを意味する。人文はこの文明にもとづき、人がそれぞれの分限にとどまること」(本書では説明が省略されているが賁卦䷖の下卦の離卦が文明を示し、上卦の艮卦が止を示す)と説明する。「分限にとどまる」とは節度ある状態、李氏の言葉でいえば調和と均衡がとれた状態といえる。

果たして我々人文學者はこのような意味での「人文」學者たりえているのであろうか。文明と人間との調和と均衡を圖る者たりえているのであろうか。人文學輕視の風潮、人文學の危機が叫ばれる今日にあって、東アジアの宇宙観コスモロジーに立脚した「人文」學の再構築を考えてみる必要があるのかもしれない。

(B 6判、二六七頁、二〇一六年二月、

講談社選書メチエ、一七〇〇圓(税別))

註

- (1) 大野裕司「國際學界動向」二〇一三日韓共同術數學シンポジウム 東アジアにおける術數學への多角的アプローチ「チ」報告記」(『東方宗教』一二三、二〇一四)を参照。その後、二〇一五年五月一日には第六〇回國際東方學者會議(於日本教育會館)にてシンポジウム「中國古代における術數と思想」が開催されている。
- (2) 佐々木聰『開元占經』開本の資料と解説』(東北大學東北アジア研究センター、二〇一三)。
- (3) 小林春樹・山下克明編『天文要録』の考察「一」

『易、風水、曆、養生、處世 東アジアの宇宙観』トホショテン

- (大東文化大學東洋研究所、二〇一〇)、同『天文要録』の考察「二」(大東文化大學東洋研究所、二〇一六)。
- (4) 三浦國雄編『術の思想』(風響社、二〇一三)、武田時昌編『術數學の射程』(京都大學人文科學研究所、二〇一四)。
- (5) 坂出祥伸『響きあう身體』(關西大學出版部、二〇一四)、大野裕司『戰國秦漢出土術數文獻の基礎的研究』(北海道大學出版會、二〇一四)、水口拓壽『儒學から見た風水 宋から清に至る言説史』(風響社、二〇一六)。
- (6) 李亦園『和諧與均衡—民間信仰中的宇宙詮釋』(同『文化的圖像(下)』允晨文化、一九九二)、同『致中和—宇宙觀芻論—關於人類永續發展的文化理念』(許在全主編『泉州文史研究』第二集 中國社會科學出版社、二〇〇六)、等。渡邊欣雄『風水の社會人類學』(風響社、二〇〇一) 第三章第二節「風水をめぐる環境認識—李亦園の理論から」も参照。

### 『東方宗教』バックナンバー 在庫一覽

6, 8・9 (合訂本), 10, 19, 20, 23, 24, 29, 32號	各800圓
63, 66, 67, 69, 71~82號	各1,200圓
86~88, 90號	各2,000圓
91~93號	各2,500圓
95~127號	各2,800圓

なお、82, 86, 90は在庫が1部のみとなっております。  
購入のお問い合わせは下記へお願いいたします。

〒175-0082 東京都板橋區高島平1-10-2  
東方書店業務センター  
(擔當、田村 正)  
TEL 03-3937-0300  
FAX 03-3937-0955  
Email: sinaba@toho-shoten.co.jp